

“大日岳”と言っても、皆さんご存知の北アルプス、富山県・室堂から登るあのでかい山ではなく、福井県と滋賀県の県境に在る 800 メートルにも満たない小さい山です。隣に“三十三間山”が在る。この名前は京都で知られた名刹“三十三間堂”を建立の折にこの山の樹を伐採して使ったのがその名前の由来だとか。関西電力の送電用高架鉄塔沿いに登るのだそうだ。日本海：若狭湾に幾つかある原子力発電所と電力需要地の近畿圏を結ぶ送電線らしい。歩き始めると高架鉄塔のナンバーが書かれた標識が在る、保守点検用の道は普通の登山道と変わらないが、所々に独特の階段が付いてある。普通の山道の土留めとか階段は木と針金、現地調達材木、もしくは麓で製材した材木に工事用番線で結わえてあるが、保守点検用の階段は黒いプラスチック製で多少しっかりしている、耐久性も在るのかもしれない。保守点検の人達に遭った事はないが、冬の積雪期も含めて、点検修理をしているのだろう。彼らは山のベテラン、電気のベテラン、鉄塔攀じ登りのベテラン、何時か何かの映像で鉄塔の最上部から電線に滑車をかけ腰かけ、するする移動している姿を見たことがある、鉄塔の上の電線接合部分で作業をする姿を見たことがある、あの芸当はとてできまい、高所平気症、猿のような機敏さ、そんなものは持ち合わせていない。家の近所にも鉄塔がたくさんあるが、この辺りの鉄塔とは形が違う、電線が違う、電線どうしを結んでいる結び方が違う、電気の事は全くわからない、少年のように「なんで・・・」と疑問が湧いてくる、どなたか教えてください。ただ最近ではテロ対策として国土地理院の地図に鉄塔・電線を書き込まなくなっただけで、山を登るには不便な事だ。この山も含めて鉄塔の下を歩くのはつまらない、保守点検用の道だ、確実に次の鉄塔まで行ける、どれかのどこかの登山道と接していない限り向こうに麓に降りてしまう。鉄塔の下で小休止、何故だか何処の鉄塔の下にも、熊蜂や雀蜂が飛び回っているのはどういう事だろう。「この道はつまらないね」と話しながらとりあえずもう少し進むと間もなく何時も見ている登山の標識が在った。少し歩くと“大日 750M”と“三等三角点”が在った。山の上は霞んでいる、低い山が連なっている、海が見える、三方五湖かな。この山も森が美しい、立派で元気なブナを何本も見つめた、まだ若々しくこれから老成してゆくというような雰囲気のある森だ、太い木の傍に白い石がごろごろ、此処も石灰岩の山なのかな。

車を止めた辺りが“開拓村”となっていた、野球場が 3.4 面取れるぐらいの平らな土地、粗末で小さいトタン屋根の廃屋が 10 軒たらず、昔から何か所か見てきた廃村・廃屋は崩れているとはいえ、此処に台所、ふろ、便所、此処で寝て、此処で作業していたのだな、というように家の形が、基礎が、壁が、屋根が残っている、懐かしい生活雑器が散らばっている。開拓村と呼ばれる此処は、家は小さく一部屋か二部屋、住んでいたというより仕事のための作業小屋、本当の住まいはもっと麓に在ったのではと思われる雰囲気だ。一軒の家に洗い終わった茶碗に箸にコップが籠に積まれていた、昨日まで何人かが居たような温かさが伝わってくる。今なら金のかかる土壁、竹の芯に土壁を塗っているが、此処なら現地調達の材料だ。この廃屋を見て、ヤノマミを思い出した。

国分拓著<ヤノマミ>NHK のディレクターが書いた本。TV で放送されたいがそれは見ていない。ブラジルとベネズエラの国境付近のジャングルの奥の奥に“ヤノマミ族”という先住民が広大な森に推定 25000 人～30000 人が 200 以上の集落に分散して暮らしている。ひとつの大きな家に 150 人ぐらいが共同で暮らしている。其処に 2007 年、2008 年、2008 年（150 日）彼らと同居した記録が書かれている。原始生活とはいえ、自分たち以外の人間を受け入れ話し同居の許可までは、パンツを穿いていない男は 10 人足らず、鉄のナイフを持っているもの、石鱈を欲しがると、キリスト教の宣教師が入り込む、政府は「教育を医療を」と言ってくる、それでもまだまだ頑なに、原始生活を守り、狩猟・漁猟と簡単な農耕、少し前までは部族間の戦争、というような生活を守っている。半世紀前の新聞で東南アジアの未開部落の特集記事が連載されていた、素裸の土人がペニスケースのみを着け、弓・槍での狩猟そんな記事を読んでワクワクしていたが、その横でジャングルを飛び回る“ターザン”もいたから、それほど驚きもなかった。アメリカ大陸に住む原住民は何万年も前にアジアから北極圏を経由して北アメリカへそして南アメリカに渡ったモンゴロイドとも言われている。強烈なシャーマニズムの世界、動物の肉、バナナ、芋の世界。男は狩猟の上手い輩、女は愛嬌のいい輩が値打ちだとか。文明が入り込めば、「え、こんなに面白いものがある」「こんなに簡単に、

病が治る」「こんな便利な道具が在る」オレのような素人でさえ、想像するだけで色々な答えが出てくる。これがいい事なのか、彼らにとって悪夢なのか。

14-041 たたら I 100614

「温泉に行こう、ちょっと遠いが・・・」「温泉、ソナモン、シャワーで充分、さっと洗って、さっと綺麗になって、さっと着替える」実はオレ、若い頃からずっと風呂に対してはこのような考え方で、長くて15分、いつもは10分が“フロタイム”という生活パターンです。何年か前に我が家にもシャワーがやってきた「風呂があるのに、シャワーが要るか」シャワーは頭を洗った時のかけ湯代わりぐらいに思っていたが、何時の日かは忘れたが、そういう考え方が、身の処し方がころりと変わって、「シャワーが一番、風呂ではさっぱりしない・・・」ともっばらシャワー党になってしまった。「温泉に行きたい、少々遠くても、車で何時間も走ってでも、好きな温泉に浸かりたい」そんなことはオレの思考回路には無い、発想には無いと思いつつ、そんなこんなで「どんなこんななんだ」「聞かぬが華」という事で、兵庫県三木市にある“吉川温泉よかたん”までやって来た。「もちろん」と言うか言わぬか「それがどうした」と言われようが謗（そし）られようが、オレは温泉には入らなかった。と言いつつ、山によく登るオレは、麓に降りてくると汗を流そうという事で、結構あちこちの温泉に入っている、温泉はよく知っているのです。

三木市“金物資料館-入場無料”に行った。学校の教室ぐらいの大きさに、大工道具がずらりと並んでいる、三木市は木工道具の生産地だそうで、お馴染みの鋸（のこぎり）鑿（のみ）鉋（かん）とずらりと並ぶ。先日読んだ本に出てくる杣人が使っていた鉋（なた）に斧（おの）木挽き道具のでっかい鋸、長い物は2メートルにもなるような鋸もある。堂々と“銘”の入った刃物類に職人の誇りや魂を感じる。先日読んだ太鼓の胴の内側に書かれた銘やら花押と同じだ「俺が造った、精魂込めて造った、使ってくれ」と満足げな顔が目浮かぶ。神戸市にある“竹中大工道具館”にも行きたいものだ。

“たたら”という文字が目に入った。“山の人”“山の民”の話の中に“たたら師”“たたらモン”という言葉が出てくる。よくオレが登る“比良山”に“金糞峠”がある、これも“たたら”と関係がある言葉だと思っていた、此処で話を聞いて、帰ってネットを検索して「なるほど」と少しわかった。

日立金属<たたらの話>より抜粋

- ◎たたらとは、鉄を作るところです。画像を見ると炭焼き小屋ぐらい。
- ◎たたら製鉄は、日本古来、千年以上続いた歴史があります。古墳時代後期に日本に伝えられた。
- ◎たたらは元来、ふいごを意味する言葉のようです。
- ◎たたらという言葉は、金属精錬と密接に関係し、インドあるいは中央アジアに源を持つ言葉と考えられます。
- ◎日本刀は、折れず、曲がらず、切れがいい、加えて姿が美しい。たたら製鉄の華。
- ◎古墳時代後期5Cに鉄製鍛冶工具が表れる。弥生時代に道具が石器から鉄器に変わるが、鉄の生産はまだなのか。ヨーロッパでは鉄器の使用と製造が同時期。弥生時代にはガラス制作技術で1500度Cの高温が得られていた。2Cには大型銅鐸制作技術、東アジア屈指の冶金技術があった。当時鉄原料は朝鮮半島に依存していた？
- ◎6C朝鮮半島から製鉄技術が渡来した。
- ◎製鉄遺跡が島根県、広島県に多い。琵琶湖周辺という言葉で“金糞峠”を納得。
- ◎室町時代には大量生産が行われた。大量の武器、農機具、工具が造られた。
- ◎たたら製鉄は明治初頭が最盛期だが、西洋文明、西洋技術による鉄の大量生産時代が始まり、幕を閉じる。
- ◎現在、昔のたたら製鉄が、日本刀を作るために細々復活。
- ◎出雲の宍道湖に注ぐ斐伊川（ひい）上流は良質の砂鉄が取れた。
- ◎ヤマタノオロチはたたら製鉄の火、炎だったのでは・・・。

最後にその隣の美術館に入った。「あ、岩根さん」なんと知人の水島さんの乾漆彫刻、裸婦があった、感激、いい作品だ。

14-042 たたらⅡ 120614

谷川健一著<山人と平地人のたたかい>短いエッセイを読んで、こういう考え方があるのか、この考え方が正しいのか、間違っているのか、まだまだ歴史に、中世の歴史に疎い限りで、検証の仕様が無いが紹介します。中世、南北朝の時代、足利尊氏と後醍醐天皇の時代、奈良・吉野に都を構え“南朝”と呼ばれたもう一つの朝廷を支えた人たちが“山の民”だというのだ。南北朝のあらしいの伝統を深く掘り下げるとき、十津川の郷士や郷民が幕末に示した朝廷に対する忠誠心<中略>吉野山中の木地師が小倉宮の伝承を長く持ち伝えている力とは。天竜川上流“大鹿村”辺りに後醍醐天皇の皇子が根城を構えていた。<中略>伊勢・志摩・熊野・大和の宇陀に勢力を持つ北畠氏、淡路の沼島（ぬしま）水軍と阿波山岳党の三木氏、松家氏、瀬戸内の一部の水軍、肥後の菊池、阿蘇、名和等の一党。南朝方は天竜川から、紀伊半島、四国、九州に至る中央構造線の作りだした道に沿って展開している。南朝方を支えたのは、木地屋、狩猟民、鉦山師、山伏などの“山の民”だった。中央構造線上には南北朝の動乱が発生するはるか前から山民の文化が存在した。そこは官道や国道ではなく山中漂白の民の移動路、交易路であった。南朝方はこれらの山民の生活文化を後ろ盾に北朝方と戦った。北朝方はもっぱら平野の富に頼っていた。南北朝の戦いは、山民と平地人の戦いという事ができる。南朝方の敗北は山民の文化が平地人に主導権を譲った事を意味する。付け加えたいのが中央構造線と水銀の関係である。話のついでにオレの大鹿村の思い出を。話は脱線しますが、大鹿村は何度か訪れた、南アルプスの登山口の一つ、鹿がたくさんいる処、中央構造線が露出して見える処が在り、わざわざ見に行った事がある、昔海だったので塩が採れる、その塩を舐めに鹿が寄ってくる、大鹿村中央構造線博物館へも行った事があると幾つか思い出せる。何回目か下山途中、オレと川添さんは雪の中でテントを張って寝たが、澤山さんは「麓で泊まりたい、明日朝会おう」と別れた。鹿が転落死でもしたのか10匹ほど横たわっていた。「昨夜の食事は鹿のルイベが出た、旨かった」「それ、あの鹿じゃない?」悔し紛れにいうと「ちがうよ」と苦笑。

辰砂・水銀：絵を描くものとしては、辰砂は赤色の事ぐらいは知っていたが、今回いろいろ調べて臙脂色（えんじ）？かなと。洋画の絵の具では、カーマイン、クリムソンレーキ、など自分がよく使う絵具の名前が浮かんでくる、臙脂色という言葉は常套句として何気なく使っているが、正解なのか、勝手に思い込んでいる色なのか、オレの頭の中ではカーマイン、クリムソンレーキ、等の色を臙脂色と言っている。日本画の材料店の辰砂も赤黒い色から赤に近いものまで、実物を見ないと何ともいえない。絵でも色でも実物を見ないとわからない写真やモニターではわからない、もっぱらアナログだ。民俗学や歴史の話から中央構造線が出てくるのはびっくりしたが、1000万年前、1億年前に酸性岩が貫入したとか、熱性鉦床が生まれたとか、懐かしい地学用語が頭の中を右から左に抜けていく。日本のように火山帯の多い処では、辰砂のような鉦物もたくさん採れた。飛鳥時代から古墳や石棺の彩色、白粉、防腐剤として用いられた。その辰砂を500度Cに加熱すれば水銀が採れるそうだ、水銀は地中にドロドロ溜まっているのかと思っていた。中世では朝廷、摂関家、伊勢神宮に帰属する人が、採掘、交易し“水銀座”が形成された。

先生が文章の初めに、次のように書いている。南北朝のあらしいを保守反動と進歩革新のあらしいのように単純化して解することが一時流行した。足利尊氏は時勢を見るのに明敏な武士であり、後醍醐帝は古い公家の政治にこだわりつづけて、適応能力を喪失した時代遅れの天皇であるという風に。先生はその後の解説で、南北朝のあらしいは、山民と平地人の戦いという風に、論を進めていた。

オレはここで考えました。古臭い栄耀栄華に固執する、時勢を見るのに明敏、これは時代を牽引してきた権力者を分析する言葉、今もよく聞く政治評論家に似ているかな、最近TVも政治解説も見聞きしなくなったが、このような解

説評論をよく聞いた。こんなのはつまらないね。ただ、朝廷に対する忠誠心を長い間持ち続け、何時の時代でもいざという時には馳せ参じる気持ちを持った人が、日本のあちこちに過去も現在も居るのは不思議な気がする。

14-043 ボコ・ハラム 180614

ボコ・ハラム<Boko Haram> 初めて聞く言葉。TVのニュースでアナウンサーの声、銃を持った兵士、泣き叫ぶ女たち、路上に転がる死体、破壊された建物や車両の映像が流れる。TVを見ない生活、ニュースから遠ざかった生活を続けていると“浦島太郎”状態かと思いつつ皆さんこの言葉をご存知なのかな。

死体、虐殺、焼死、爆発、破壊、と並べてみても目の前で現実に見た事も無い、それこそ映像・画像でしか見た事が無いが、5歳年上、10歳年上の絵描きのおっさんたちが美術館で怪気炎を上げていた「目の前で見た、死体がごろごろ」「爆弾で逃げ回り、火事で逃げ回り」「艦載機の機関銃で逃げ回り」「B29（当時のアメリカの爆撃機）の警戒警報で防空壕に逃げ込み」と彼はそのようなテーマの絵をお洒落に軽く描き上げていた、オレの親やその兄弟たちもそんな話をしていた、見た事が無いが少し前に、オレの1年2年以上前に生まれた人達は、日本が戦場になって爆弾や機関銃の攻撃を受けた人たちがたくさんいた。アメリカの航空母艦から飛び立った戦闘機が都会まで来て機関銃を乱射した、アメリカの同盟国の飛行場から大きな爆撃機（B29）を飛ばして、無差別に爆弾を投下して行った。“ジュウタン爆撃”と親たちが言っていた、子供心に何とも思わなかった、この年になって今ハッと気づいた、万遍なく“風潰し”に、絨毯を敷くように、“絨毯爆撃”というのか、勝利という目的の為に何でもする、合理的に処理するアメリカ人の発想か、大阪も絨毯のように爆弾を撒かれた。焼け野原になった、それでも全滅しなかった、親たちも生きていた、そのお蔭でオレも終戦から1年目に生まれたのだが。これが白兵戦、地上戦ならもっと悲惨、敵の顔を見て討つか討たれるか、それが“同じ民族”“同じ種族”ならもっと精神的なダメージも変わって来るだろう。

話は脱線したがボコ・ハラム Boko Haram とは<西洋式・非イスラム教育の罪>ナイジェリアの一部の人達が、ヨーロッパ文明・教育・現代科学・ダーウィン主義を否定するという運動。宣教及びジハードを手にしたスンニ派イスラム教徒としてふさわしい者たちの集まり。国際テロ組織アルカイダとも連携の声明をしている。

現在ニュースになっているのは、ナイジェリア（1億3千万人）の国内の一部のイスラム教徒が破壊、誘拐等をして現政権を攻撃しているらしい。

「おおよそ争いの原因は、戦争は、力・宗教・民族、の三つが原因だ」とほざいているオレ、これに第三国の「営利」を加えんといかんなど思ったりして、第三国とは武器製造国、武器輸出国、アメリカかな。とまた脱線、アフリカ大陸、中東諸国、これらの国では何時でも何処でも小競り合いが絶えない、どこかで規模の大小にかかわらずドンパチやっているね。今回の話はこのドンパチの話ではなく、<ヨーロッパ文明・教育・現代科学・ダーウィン主義を否定する>という事にオレの琴線が触れました。

日本人はヨーロッパ文明・教育・現代科学・ダーウィン主義を、明治を境に入ってきたヨーロッパの考え方を、技術を学んだ、取り入れた、吸収してきた。オレも含めてほとんどの日本人はこの100年、150年、日本に根付いたこれらの文化を迷うことなく選択し賛同している、それまでの文化を捨てこそしないが、上手に歴史に路線に沿わしている。欧米という言葉があるが「ヨーロッパ、アメリカ人が唱えてきた事、進めてきた事、考えてきたことが世界の主軸」これは違うでしょう、と言いながらも、アジアも中近東も、南アメリカも欧米の文化に酔いしれている。

<ヨーロッパ文明・教育・現代科学・ダーウィン主義を否定する、自国にも立派な物、素晴らしい考えが在る、それを見直そう、それを愛でよう>これは明治の日本でも囁かれた、インドにも在った、いろんな処で国で囁かれているはず、元来持っているもの、何世紀も伝えられてきたもの、これに愛着が無い方がおかしい、否定するのがおかしい。

ダーウィン主義<ダーウィニズム>生物の進化論を象徴する言葉、生物の遺伝形質が世代を経て変化する現象。

この考え方も普通に素直に「そうだな」と今までは納得していた。世界には「世界は神が創造されたものだ」「進化とは神の領域を冒瀆するものだ」「神以外の者が、進化、創造をしてはいけない」と唱える人たちがたくさんいる。今までのオレなら「そんなあほうな・・・」と言っていた、今は「信じるものを、信頼するものを、持っている人たちはすごい・・・」「そういう感覚を持っている人たちを素晴らしい・・・」ただ、「おまえの考え方が違う、生き方が違う」と言って銃を向けないでほしい。

14-044 えかき三昧 230614

六月も下旬だと思いながら、ふと我に返り、六という数字を反復して覚醒したやらないやらの頭で考えてみた、などとえらく大袈裟な表現をしているが、今年も半分が終わりそうな時期に来ている。いかにもなんだか“ぼおう”と過ごしている、先日までの寒さが無くなり、朧げに暖かくなり、この暖かさが体調を悪くする、毎年三月から始まる“鼻ずるずる”がすべての原因、五月六月になるとますます生暖かく、ますます“鼻ずるずる”がひどくなり、体力が落ちる、元気がなくなる。相変わらずほとんど毎日“安威川詣で”これまた妙な表現をしますが、この言葉今使ってみて意外と「いい響き、いい感じ」これからは毎日“安威川詣で”をしよう、川を愛で、詣で、神にまで昇格していただく。今日も河川敷を走りながら水の見えない処でバタバタ音がする、何時もなら鴨か鶉が水から舞い上がる時の助走のバタバタ、懸命に足で水を蹴る水音なのに今日は鳥の姿が見えてこない、しばらく待っても前方にも後方にも飛び上がってこない「あれは鯉の交尾の音」鮭の遡上でよく見る映像は、鮭のメスがいよいよ産卵という時になると、オスが数疋、一疋のメスの周りを乱舞して、射精のタイミングを計る「我が一番、一番に射精したい」「私の精子を受精させて、他の奴らには邪魔されないぞ」とバタバタ跳ねる水音、鯉も同じように射精のタイミングを狙ってバタバタしている音だろう、なんと神々しい風景、神の領域だ、オレも横を走りながら、何も思わず何も考えず、ぼおうと前の“朧げ”を見ている。

三月の終わりが展覧会だった。去年の暮れ以降、3号、6号、10号というような小さい作品造りに没頭していた、「ちょっとは売りたいねえ」「少しは儲けたいねえ」とたくさん描いた小さいものと、それまでに描き溜めていた大きな作品を展覧会で並べた。

作品の写真撮影を永らくしていない「半年ぐらい大きな作品が出来上がらなかったが、いよいよいいのが何点か出来上がって来た、ぼちぼち撮影をしなければ」振り返って考えるに展覧会が終わってからの3か月、聞いてください、最近になって実に面白い作品をたくさん造った、上手く出来上がった、悦んでいる。「河合さん、新しい絵を考えています」なんて展覧会直後に言ってしまうと、その時点で考えていたこと狙っていた事が二つあった。一つは、二枚組の「わたしはわたし」の連作を作ること“わたしはわたし”はオレの虎の子、これを何点か造ろう、大きい作品も造ろう。もう一つは我が檻樓君が絵にならないか、どうにかして作品にならないか、頭の中で、絵がぐるぐる回るのが、絞りきれない。元々檻樓君は写真を撮ろう、写真に写すことを目的に造り出したが、発想の逆転でこいつを絵にしたいと思いだした。写真を加工して絵の下図を作るか、それとも檻樓君をモチーフに彼を前に置いて直接キャンバスに向かう、右へ左へ写す、デッサンをする、現在3枚挑戦中だがまだ芳しき結果は見えていない、山師の感ありだ。それに比べ、組の「わたしはわたし」が5枚6枚といい仕事が上がりつつあるのはうれしい限り。皆さんそのうち見てくださいね。

水彩画も始めた。40歳代には夢中で水彩画を描いていた、タブローも描いていたが水彩画の方が面白かった、最近ほとんど水彩画を描いていなかった、水彩絵の具が固まり、色数が減り、紙が無くなり、というような状態が続いてご無沙汰をしていた。これは、オレが感じているだけなのかもしれないが、当時モンバル・キャンソン紙の10M巻を常時買っていた、次の新品に描きだしたときに「絵の具の乗りがおかしい、上手く描けない」と感じた、一度感じるとその一本はオレの中で否定の状態が続いて、次のもう一本を買ったかどうかは覚えていないが、そんなことがあつ

てからは水彩からキャンバス画に移って行ったように覚えている。最近、紙を、水彩絵の具を、グワッシュをといくつか買った、店では仕方なくモンバル・キャンソン紙を選んでしまった、本当はアルシュ紙が欲しいと思いながらモンバル・キャンソン紙を選んだ。水彩画が1枚でも売れたらアルシュ紙を買うぞと思いつつ。5枚10枚と描くうちに、水彩画が身体に馴染んできた「この面白さだった」と分かってきたが、十数年毎日のように描いていないと、水張りまでもがうまくいかない、下手になっている、皺がよる、剥がれる、絵の出来上がりが波打っているとお粗末な、情けない状態が続いた。

今は張り切って描いている、タブローも水彩も。ついでに、このブログも・・・。

14-045 若い頃 280614

宮本常一著<民具学の提唱-1980年ごろ>民俗学の中の民具の事を著わしている。

- 1) 民具は有形民俗資料である。
- 2) 民具は人間の手によって、あるいは道具を用いて作られたものであり、動力機械によって作られたものではない。
- 3) 民具は民衆が、その生産や生活に必要なものとして作り出したもので、使用者は民衆に限られる。専門職人の高い技術によって作られたものはこれまで普通、工芸品、美術品などといわれ、多くは貴族や支配階級の人々によって用いられた。これは民具と区別すべきである
- 4) 民具はその制作に多くの手続きを取らない。専門の職人が作るというよりも、素人または農業、林業、漁業などのかたわら制作したものである。
- 5) 民具は人間の手で動かせるものである。
- 6) 民具の素材となるものは草木、動物、石、金属、土などで原則としては化学製品は含まない。
- 7) 複合加工を含む場合は仕上げをするものが、素人または半玄人であるもの。

これを読んで、友人の小林先生が「素晴らしい映画を見てきた、感動した」と叫んでいたのを思い出した。題名は<三丁目の夕日>その叫びから遅れること1,2年後にオレも見た、<三丁目の夕日><続・三丁目の夕日>まで見られたというおまけが付いていた。「さすが彼が感動したのもわかる」と笑いながら同じように感動した。内容はオレたちの若い頃の話、出てくる風景が、会話が、話題が昨日のように思い出せる。道路を走っている車が思い出のある車、男も女もそういえばあのような格好をしていた、貧乏な日本人がシャツにズボン、前掛けに下駄、そこら辺りに貼られた宣伝ポスターの文言「おお知っている、おお覚えている、おおそういえば我が家もそうだった・・・」というようにどんどん出てくる、このような話を始めると、ひとりひとりが過去に嵌まって涙まで出てくる、同じ世代、時代を体験したものにはしか言えない、感じられない懐かしさだった。

先日もアメリカ在住の仲野氏が電話をかけてきて「最近仲間が死んでいく、アメリカ人も日本人も・・・」「寂しいねえ、岡村君、オレが死ねば寂しいだろう・・・」と言いながら、「同じ世代時代をシェアしてきた知人友人に死なれることは、彼らがいなくなることは寂しい」としみじみ語っていた。

話は飛んだが、映画<三丁目の夕日>の時代設定は、日本がまだまだ貧乏で、汚く「腹が減った、旨い物が食いたい、いい服が着たい、アメリカのようになればどれだけ素晴らしいか・・・」と言っていた頃、高度経済成長のまっただ中、そのまっただ中に居た時にはわからなかったが、何もかもがどんどん変わっていった、今から考えると、日本の、日本の中でも都会がどんどん変わっていった時代じゃないのかな。

<民具>と聞いて、その地方それぞれによくある<資料館・博物館>を思い出した。農業、林業、漁業の作業用道具、そういえば半世紀前まではこのような道具が活躍していたな、覚えているよ、というようなものが陳列されている。先日行った三木市の“金物資料館”も正にそれだった。木工用金物工具が専門の三木市の資料館には<ノコギリ・ノミ・カンナ・・・>とお馴染みの大工道具がずらりと並んでいた。

色々な工具、道具、使いこなす技術、工夫が何世紀も伝えられ、教え込まれてきたが、たった50年でガラリと変わってしまった。基本的な形や考え方は今の機械に工具に活かされてはいるが、根本的にガラリと変わってしまったという方が正解じゃないかな。この“ガラリと変わってしまった”というのがいかにも残念、こんなに変わってしまったていいのかといつもオレは怒っている。

WEBで大阪の民族学博物館の近藤先生の話があった。彼は武蔵野美術大学一油画出身だそうで民具の写真、スケッチは言うまでも無く製図まで描くそうだ。民具はもちろん色々な構造物の図面を描くのはいいことだ、作り方、使い方、分解の仕方がすぐにわかる、スケッチも専門なので上手いものだ。知らなかったが宮本常一が武蔵野美術大学の先生だったようだ。しかも山口県・大島郡と聞けば「オレの母親の父、爺さんの出た処」とますます気にかかる。